

高等学校英語科の授業における言語活動の在り方について

—思考を深める授業デザインの一提案—

森 谷 町 子

新学習指導要領では、すべての教科等において、言語活動の充実が求められている。英語科の授業においても、様々な言語活動が工夫されてきている。とりわけ、既習の英語を駆使して考えや意見を表現し、生徒同士で共有する活動においては、新たな気づきや発見は顕著であり、生徒の情意面にも影響し、深い学びにつながっているように感じてきた。「コミュニケーション英語 I」の授業で、そのような自己表現活動を中心に据えて授業実践をし、そこでの生徒の変容を追い、分析した。

〈キーワード〉 言語活動、自己表現活動、意見・考えの共有、思考の深まり、単元構想

I 主題設定の理由

平成25年度より、新高等学校学習指導要領が年次進行により実施されている。そこでは各教科等において「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむ」ことや、「生徒の発達の段階を考慮して、生徒の言語活動を充実する」ことが求められている。また、英語科に関する各科目においては「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」とされている。教師が英語で授業を行うだけでなく、生徒の英語による言語活動を中心に据え、思考力、判断力、表現力の育成を目指した授業づくりが求められている。

これを受けて、平成24年度より、「英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取組」拠点校をはじめ県内各高等学校において、新学習指導要領に基づく授業や評価の在り方について活発に議論され、公開授業等を通して発信されてきた。そこでは、教科書本文の内容理解をペアで確かめ合ったり、要約して伝えたりと、様々な活動が工夫されている。中でも、意見や考えをペアやグループで交換する場面においては、教科書本文の内容を身近な問題として捉え直して自分の考えを発信し、生徒同士で共有する活動を通して新たな気づきや学びがあり、思考が深まっているように見て取れる。このような活動における生徒の気づきや変容をたどり、考察することを通して言語活動の在り方を検討し、高等学校英語科の言語活動を重視した授業改善の一助にしたいと考え、本主題を設定した。

II 研究の目的

「コミュニケーション英語 I」の教科書本文の内容について、意見や考えを話し、共有してから英作文で表現する活動を設定し、実践する。そこでの生徒の気づきや学び、変容等を分析することにより言語活動の在り方を考察し、思考や表現の深まりにつながる単元や活動デザインの一例を提案する。

III 研究の方法

- 1 公開授業参観や文献研究を通して、英語の授業における言語活動の在り方について考察する。
- 2 「コミュニケーション英語 I」の教科書に基づく言語活動例を設定し、単元構想表を作成する。
- 3 研究協力校で授業実践をし、ワークシートの記述やアンケート等の分析、考察をする。

IV 研究の内容

1 公開授業参観および文献研究による、英語の授業における言語活動の在り方についての考察

(1) 英語の授業における言語活動

以前、「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」の授業に自分が取り入れていた活動や、今年度、「コミュニケーション英語Ⅰ」「英語Ⅱ」等の公開授業で行われているペアやグループでの言語活動を、大下(2009)が紹介しているコミュニケーション活動の4つのグループに分類すると、表1のようになる。

表1 言語活動の分類

大下(2009)による活動の分類	ペア・グループでの言語活動例
①操作的活動(manipulative activity) 模倣反復やパタン・プラクティスのような機械的 操作の活動	● 語句やフレーズ訳をペアで確認 ● 音読練習 ● 例文の暗記や暗唱とその確認 ● 英文中の語句を入れ替えての自己表現 等
②情報处理的活動(procedural activity) 正確に情報を引き出したり、表出したりする情報授 受の活動	● インフォメーション・ギャップ活動 ● 本文内容に関するQ&A ● 本文のサマリー、リテリング、リプロダクション活動等
③解釈的活動(interpretive activity) 得た情報に対して自分なりに解釈を加えたり、その 解釈(意見や考え)を交換する活動	● ペアやグループとしてまとめた意見や作品の発表 ● 本文に関する意見や考えの交流
④人間的活動(humanistic activity) 学習者が情意面で強いインパクトを感じる活動	

④「人間的活動」は、意見や考えを交換したりする③「解釈的活動」と重複する部分も多いが、「生徒の感動や同情、強い反発など」を誘い出すような教師の工夫によって、生徒に強いインパクトを与える活動にすることが可能である。もちろん、①「操作的活動」②「情報处理的活動」も、語学力の向上には不可欠である。しかし、コミュニケーション本来の目的を考えると、①や②の活動のみに偏ることなく、③や④の活動も充実させていく必要がある。英語を使って自然なコミュニケーションをとりながら思考を深め、表現力も高めていくことが理想である。

「コミュニケーション英語」の授業では、一つの単元において、例えば図1のようなイメージで自己表現活動を展開することが考えられる。本文内容を理解した後に、その内容に関して教師からの発問が投げかけられる。

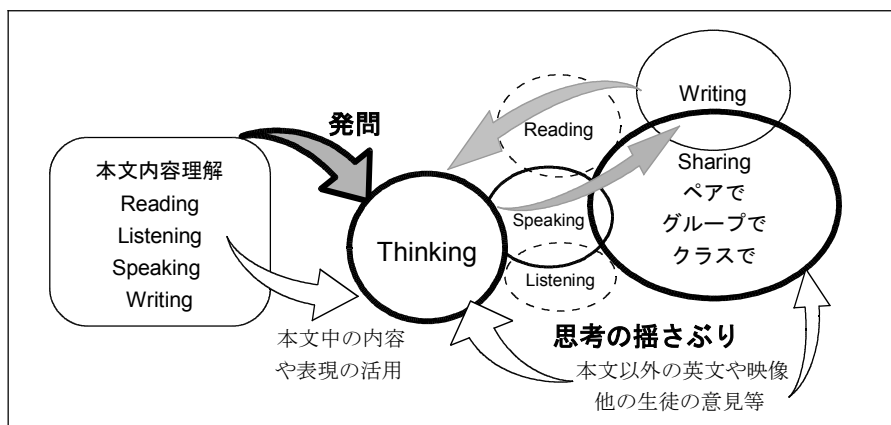


図1 「コミュニケーション英語」授業での活動展開イメージ

それについて考え、表現しようとする中で、思考が整理される(Thinking)。さらに、本文内容に関連して、他の視点から書かれた英文を読ませたり、関連する映像を見せたり、ある生徒の意見を取り上げて教師がさらに問いかけたりすることで、思考を揺さぶることができる。また、自分の考えを口頭で発信し(Speaking)、他の生徒と様々な意見を共有する(Sharing) ことでも、考え直すことがあるだろう。このような「思考の揺さぶり」により思考が深まった時点で英作文(Writing)し、またそれをお互いに読み合うことでも共有(Sharing)ができる。4技能を統合しながら、表現活動を活性化していくことが可能である。

本研究では、この意見や考えの共有(Sharing)の場面に焦点を当て、生徒達が他の生徒の意見等に触れることで自分の考えを膨らませたり整理したりしていく様子を追跡したいと考え、実践した。

(2) 意見や考えを伝え合う活動

「意見や考えを伝え合う活動」のメリットとして、まず、自己肯定感の醸成や他者理解につながるということが挙げられる。このような活動では、本文内容に関する正誤問題とは違い、正解は一つではないため、「誰もが参加する資格があり、誰もが考えを認められる機会がある」(前田 2012)。また、意見のやりとりをするコミュニケーションを通して、学習者は「自分自身をも深く知り、自分と仲間に対する肯定的な気持ちを育て、友好的な人間関係を築かせる」(江利川 2012)ことも期待できる。実際、英語を使って意見や考えを表現し共有する授業では、お互いを理解しようとしている集団の温かさを感じる。

さらに、英語学習や表現活動に対する意欲にもつながると考えられる。例えば、授業でよく行われる「本文内容を要約して伝える」活動も、実生活における「伝聞」という視点において重要なスキルであり、身に付けさせたい力ではある。しかし、生徒達は教師から指示されるから要約しているのであり、心から伝えたい内容だろうか、と考えると疑問が残る。考えを問うことは多様な反応が予想され、その考えは人と違ったり同じであったりすることで「もっと聞いてみたい」「私の考えを聞いてもらいたい」という活動に対する意欲につながっていくと考えられる。

(3) 意見や考えを繰り返し話してから書く活動へ

意見や考えを英語で表現する際には、「英語で書いてから話す」という活動もよく見かける。話す前に書かなければ不安だという生徒も中にはいるだろう。

公開授業等では、「ペアを替えながら繰り返し話す活動」において、特定の生徒の発話に注目し、活動や授業を通してどのように変容していくかを観察した。繰り返し話すことで、確かにより流暢に話せるようにはなっていく。しかし、あらかじめ原稿を作成し、読み上げている場合は、繰り返しペアで話していても、内容や表現が改善されていく様子はあまり見受けられない。聞き手の生徒は、ワークシートがあれば、相手の話した内容をメモしながら聞いているが、そのメモが、その後活用されることもあまり見られない。一方、話す内容をメモし、それをもとに対話を繰り返していく場合は、比較的柔軟に内容を増やしたり、違う表現で言い直したりしている姿を目にする。

教科書本文が介在する「コミュニケーション英語」の授業において、学習指導要領に示されている「聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考え等について、話し合ったり意見の交換をしたりする」、また「簡潔に書く」活動をする際には、意見や考えを書いてから繰り返し話すのではなく、メモだけをもとにクラスメートと考えをやりとりする中で思考を深め、内容や表現を改善していけるのではないかと考える。もちろん、スピーチのように、あらかじめ練り上げた長い英文を話す場合など、活動の目的によってはこの限りではないが、このような仮説のもと、実際の教科書を用いて言語活動を設定し、授業実践を行った。

2 「コミュニケーション英語Ⅰ」の教科書に基づく言語活動例の設定、単元構想表の試作

授業実践にあたり、研究協力校で採択が決まっていた『UNICORN English Communication 1』各レッスンの、主に本文内容理解終了後に行うメインの言語活動を設定した。到達目標にあわせて考える必要があるため、言語活動も書き込んだ形式の「指導と評価の年間計画」案を作成し、提示した(平成24年度末)。さらに25年度は、実際の時間数の中で可能な範囲で実践させて頂くため、ピックアップした単元の活動について、より具体的な指導案を作成し、提示した。その際にも、単元終盤のメインの言語活動だけを提示すれば良いというわけではなく、単元を通して何を考えさせ、どのように深めさせたいか

本文中の「一瞬一瞬を大切に」という「時間」からのメッセージを受け、「これからの高校生活をどう過ごしたいか」について話した後、英作文で表現する。	
学習活動	指導上の注意点
(1) 話そうと思う内容のキーワードをメモする。 (2) メモをもとにペアで話をする。ペアを替えて3回繰り返す。→メモ (3) 話したことをもとに、「What I want to try in high school. 高校生活でやりたいこと」というタイトルで英作文を書く。→作文	<ul style="list-style-type: none"> ・ キーワードのメモを板書しながら活動例を紹介した。 ・ 1回目は話し手の態度(アイコンタクトや声量)、2回目は聞き手の態度(キーワードを繰り返して反応する)、3回目には聞き手が話し手の内容に関連する質問を1つするよう指示をして、内容が深まるきっかけを与えた。 ・ ペアトーク間に、内容や表現を考え直す時間を与えた。 ・ ペアトークを通して気付いたことや改善したことを生かして書くよう指示した。

- ・ メモと作文とを比較し、内容や表現の変化を分析する。
- ・ 「活動の振り返り」でペア活動を通して気付いたことなどを選択形式で質問する。

② 生徒の活動の様子、メモ、作文、活動の振り返りと考察

(※生徒のメモや作文は誤りを含んだままである。)

ペアトークは、相手を替えて3回行った。2回目は「話し手のキーワードを繰り返す」などして、聞き手が反応することを指示したところ、「I think so, too!」など、様々な反応をしながら、1回目比べて活発に話をしている様子が見られた。3回目は聞き手に内容に関連する質問をさせたが、質問によって深めるというのは、やはり難しい様子であった。具体的な発言内容の変化を確認することはできなかったが、ペアトークの合間にメモを書き足したり、修正したりしている生徒の姿が見られた。指導者がメモを板書しながら活動例を示したため、ほとんどの生徒がキーワードだけを頼りに活動を進めることができたが、内容が指導者の例に酷似している生徒もいた。表現に自信がない生徒にとっては、指導者の例も参考になる材料の一つになり得るであろうが、そこから派生して、自分なりに表現するようになった生徒も見られた。図3に示した生徒1は、メモは指導者の例をまねて書いた(メモ中◇印)ようだが、作文の段階では例から離れ、内容もメモ段階よりも増え、離れたところを書いた語が一文の中につげられている。もちろん、初めから自分なりの英語を用いて表現をした生徒も多数いた。図4に示した生徒2は、メモには「win」「practice」とあるが、作文中には「初心者だが、勝ちたいので練習する」という流れができていく。いずれの例も、ペアトークの中で自分なりの考えがまとまったのではないかと考えられる。

活動の振り返りでは、入学後間もない時期であるので、クラスメートに対する理解が深まった(67.6%)のはもちろんであるが、「友達が使っている表現が参考になった」(73.5%)、「言いたいことや書きたいことが増えた」(55.9%)と答えた生徒もおり、対話をするのが表現面、内容面での広がりや深まりにつながったことがうかがえる。

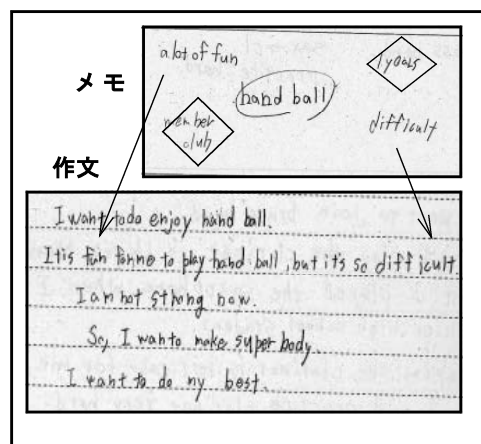


図3 生徒1

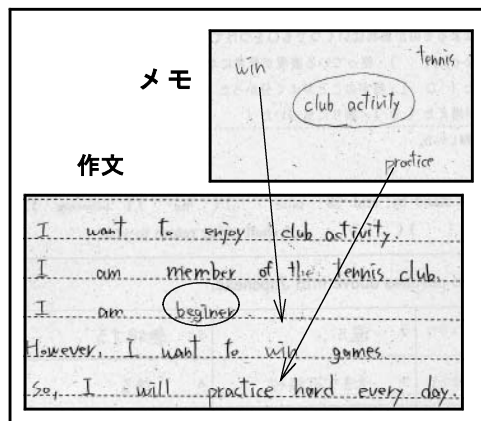


図4 生徒2

(2) 授業実践2 『Fuku-English Introducing Fukui to the World』 Episode 1 Fukui Prefecture

① 活動の内容 <福井県の紹介を、メモをもとにグループで2回話してから英作文>

シンガポールから来たツアーコーディネーターのAlexに、福井市の旅行代理店に勤めるMakiが福井を紹介する場面で、Makiの立場になって、福井のおすすめのものを口頭で紹介した後、英作文で表現する。	
学習活動	指導上の注意点
<p><第1時> (1) Part 1 視聴、Comprehension Questions、状況把握 ブレインストーミング「福井といえば思い浮かぶもの」 (2) Part 2 視聴、Comprehension Questions (3) (1)で挙げたものから、Alexに勧めるものを一つに絞り、その説明をメモする。→メモ1 <第2時> (4) Further Information 概要把握、音読 自分の表現活動に使えるような表現を探す。 (5) グループ活動1 前時に作ったメモを再考し、グループ内で「おすすめのもの」を英語で紹介。他のメンバーの発表を聞きながら、自分も使えるような表現をメモしておく。 (6) グループ活動2 同じものを選んでいるメンバーでグループを組み直し、もう一度英語で紹介する。自分も使えるような表現をメモしておく。→メモ2 (7) ライティング 2回のグループ活動を経て、おすすめのもの紹介文を書く。→作文</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ペアでできるだけ多く挙げさせる。 ・MakiとAlexが挙げた福井の有名なものを確認させる。 ・メモを回収し、次時のグループ活動2のグループ編成をしておいた。 ・「福井のものを勧める」という課題意識をもって本文を読ませる。 ・座席に基づいたグループ編成であり、紹介しているものは様々である。生徒が取り上げたものの写真をパンフレット風にまとめたものを各班に配付し、自然な状況で説明できるようにした。 ・クラスメートの使っている語句や内容で参考になるものを、色ペンでメモに書き足すように指示した。 ・テキスト本文やクラスメートの表現から使えるものは積極的に使うことを勧める。

- ・**メモ1**、**メモ2**、**作文**を比較し、内容や表現の変化を分析する。
- ・「活動の振り返り」でグループ活動を通して気付いたことなどを選択形式で質問する。

② 生徒の活動の様子、メモ、作文、活動の振り返りと考察

第1時の終了直前に福井の有名なものや場所を一つに絞り、その紹介を考え、メモする時間を5分間程度与えた後にメモを回収したが、その段階ではメモにあまり記入は見られなかった。第2時はじめにテキストの Further Information を読み、内容確認・音読活動の段階で、本文中から表現活動で使えるような語句に下線を引かせたところ、be located, surrounded by mountains, local specialities など、本文中の語句を使って紹介をしている生徒が多く見られた(図5)。英文を読む前に、読後の活動(ここでは「福井のおすすめのものや場所の紹介をする」)を示し、一度考えさせたことで活動の見通しがたち、本文を読む姿勢に影響したのではないかと考えている。グループ活動1ではうまく紹介できずに苦戦していたが、グループの中で助け合い、「(選んでいるものは違うが)自分ならこうする」と、アドバイスする姿も見られた。グループ活動2は、2回目の活動でもあり、また、同じものを取り上げた生徒が集まっていることもあって、はるかにスムーズに活動が進んでいる様子であった。2回のグループ活動を通して、内容や表現を十分膨らませ、メモを整理する生徒もいた(図6)。

「福井のおすすめのものや場所を紹介する」という課題は、自分自身の考えを述べる活動ではないため、メモだけで即興で話すのは難しいと思われる。しかし、テキスト本文や、他の生徒が用いている表現等を参考にし、紹介文を書く活動につないでいった生徒が多数いた。活動の振り返りでは、「友達の考え方が参考になった」「友達の使っている表現が参考になった」と回答した生徒がともに78.8%、「書きたい内容が増えた」生徒(69.7%)や「自分の英語の誤りに気付いた」生徒(45.5%)もあり、即興では表現しにくいトピックであっても、クラスメートからヒントを得て、内容や表現を膨らませていったと考えられる。また、「友達の話し方が良かった」と回答した生徒が63.6%おり、実践1(38.2%)に比べ、クラスメートを肯定的に受け止める姿勢が見られた。

(※メモ1は第1時終了時、メモ2は2度のグループ活動後のメモ。誤りもそのまま掲載。)

図5 生徒3

図6 生徒4

(3) 授業実践3 『UNICORN English Communication 1』 Lesson 7 Why Are You Sleepy?

① 活動の内容 <グループで対立意見を検討し、クラスで共有してから英作文>

睡眠について書かれた英文に関連させて、理想的な睡眠について考えさせる。「早寝早起きが好きだ」という話し手の意見とその理由とを理解し、その意見に対する賛否を理由とともに述べる。グループで賛否両方の理由を考え、クラスで共有した後、英作文をする。	
学習活動	指導上の注意点・反省点
<p>(1) 本文の内容を思い出し、説明する。</p> <p>(2) 教科書課末 EXPRESS YOURSELF の音声CDを聞き、話し手の意見とその理由とを聞き取る。</p> <p>(3) (2)の意見に対する自分の考えを、ペアで述べる。ペアを替えて2回話す。</p> <p>(4) 4人グループで賛成の理由、反対の理由をそれぞれ2つ紙に書き、黒板に貼り出す。</p> <p>(5) 黒板に貼り出された意見を、全員で共有する。</p> <p>(6) 最終的に、自分の考えを理由とともに書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・表現活動の中で、本文の内容や表現を使えるよう、前時までの復習をさせる。 ・「相手の意見に反対意見を述べる」活動も計画していたが、時間の都合で省略した。 ・各班に紙を1枚ずつ与えたり、ペンを1本ずつ与えたりするなどして、班で協力させる工夫が必要であった。 ・類似の内容をまとめたり、対比したりする。 ・最初の自分の立場や理由にはこだわらず、論理的に自分の考えを支持できそうな理由を選ばせる。

今回は「早寝早起き」という、誰もが良いことだと認識しており、意見が対立しそうではないトピックを敢えて取り上げた。本文の内容(高校生に必要な睡眠時間)や、生徒の実生活での習慣や経験等を尋ね、対話をしながら思考の揺さぶりを試みた。まず、自分の考えをメモし、ペアトークを2回した後、4人グループで活動することで多様な考えを共有し、賛成・反対の理由をグループの考えとしてまとめて発表させた。

② 生徒の活動の様子、活動の振り返りと考察

メモによるペアトークの段階では、それほど多様な意見が出ているようには感じなかった。しかし、グループ活動の中で、新しい考え方に気づいていった様子が、活動の振り返りからうかがえる。「グループ活動は考えを深めるのに役に立ったか」という質問に対して「役に立った」と答えた生徒が90.3%と大多数を占め、具体的には「他の人の意見を聞いて、新たな意見ができた、良い発想が浮かんだ」「違う意見を聞いて、なるほどと思うことがあった」「自分一人では思いつかなかったことが分かった」「助けてもらった」という記述が見られた。各グループから出された理由を賛成・反対に分けて黒板に貼り出し、クラスで共有した際にも、全員の顔が上がり、他班の考えに興味深げに見入っていた。教科書本文中に繰り返し出てきた語彙(brain, awake等)が活用されており、また、それらの語彙は、賛否どちらにおいてもキーワードになっていた。“The early bird catches worms.”ということわざを辞書で調べた班は、クラスの関心を集めていた。出された意見をグルーピングしたり、対比したりする中で、生徒に更に思考を促すようなファシリテーションの技術が指導者には必要であると感じた。



(4) 授業実践の考察

以上の実践を通して生徒たちは、意見や考えを共有する中で、新たな考え方や表現に出会い、他との違いを楽しむかのように、積極的に活動に取り組んでいた。活動の振り返りでは、クラスメートの考え方や使っている表現が参考になると答える生徒が7割を超え、自分の使っている英語の誤りに気づく生徒も3～4割程度いた。それでも誤りを含んだままの作文も多いことから、正確さの面では、ある程度生徒同士の学び合いに任せた後、指導者がきちんと指摘することも必要である。

参考になる意見や表現は取り入れることも推奨しながら活動を進めてきた結果、生徒の自己表現活動に対する意識に変化が見られた。入学時点で「英語で自分の考えや気持ちを表現することが好き、どちらかというが好き」と答えた生徒は約41%で、これは、該当する学年が2012年（中学2年1月）に受けた県学力調査の県全体の結果とほぼ同じであった。3回の実践の他、教科担任の授業におけるスモールトーク等の活動にも積極的に取り組み、半年後の11月には、このような活動を肯定的に捉えている生徒は80%になった。また、自己表現活動が好きな理由として、4月当初は「楽しい」と答えた生徒が過半数だったのに対して、11月には、単に「楽しい」だけでなく、クラスメートの考えを知ったり、使っている表現を参考にしたりすることに、自己表現活動の意義を見出していることがうかがえた。また、自分の考えを知ってもらいたいと思う生徒も出てきた。

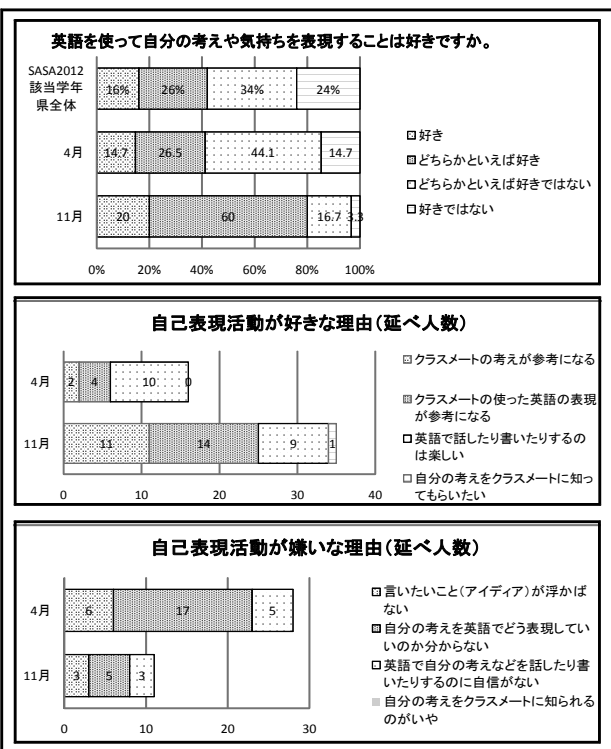


図7 アンケート結果より

自己表現活動は生徒相互の理解を深め、聞き合う関係、学び合う関係の構築にも寄与するだろう。そのことは、活動の振り返りで、多くの生徒が「相手のことがよくわかった」「相手の話し方が良かった」と答えていることにも、またペア活動やグループ活動に対する肯定的な捉え方にも現れている。何より、

時期を分けて単発的に授業をさせて頂いた筆者自身が、実践クラスで感じたことでもある。

一方、自己表現活動が好きではない理由としては、アイデアが浮かばないことや、浮かんでも英語での表現がわからず、自信をもてないことが考えられる。しかし、そのような生徒にこそ、クラスメートの考えや表現を参考にすることを勧め、活動に巻き込んでいくことに意味があるのではないかと感じている。分かっている生徒が分からない生徒に教える、「教え合い」の関係ではなく、お互いの考えや表現から参考になることを積極的に吸収し、より良いものに練り上げていくような、「学び合い」の関係の構築につながるのではないだろうか。

V 研究の成果と課題

今回の実践を通して、これまで漠然と頭の中にあっただ「考えを共有することによる思考の深まり」「単元を通しての思考の深まり」というものを具体的に整理することができたと考えている。生徒が使う英語の誤りにどう気付かせ、訂正していくかということには課題があるが、考えたことをメモし、共有する活動を通して、内容や表現を膨らませ、考えを深めていく様子が見受けられた。同じ教室の中で共に学ぶクラスメートから出された新たな視点や発想は、生徒達にはインパクトがあり、刺激的な揺さぶりになるだろう。また、単元の見通しをもって言語活動を設定することで、教科書本文を活用し、内容や表現を深めていくことも可能になる。生徒の言語活動中心の授業に転換していこうとする際に、無理せず取り入れられる、授業のひと工夫として提案したい。

そのような授業においては、生徒の発言や考えを巧みに捉え、クラス全体を思考の渦に巻き込んでいく「ファシリテータ」の役割が教師に求められている。教師自身が固定観念に捕らわれず、様々な視点や考え方を受け止めながら、柔軟に進めていくような授業を目指したい。

本研究では、英作文に書いて表現するまでの思考の深まりに焦点を当てたが、表現する際の論理的思考や、理解する段階での思考、より大きなプロジェクトを進めていく思考等、英語の学習には、考え、深める場面はまだある。外国語科の他の科目ともあわせて、バランス良く4技能を伸ばし、思考力、判断力、表現力を伸ばしていくための指導計画、評価方法等を検討し、充実させていかねばならない。

最後に、本研究の実践のために御協力頂きました、福井県立羽水高等学校小松めぐみ先生をはじめ英語科の先生方、また、授業を参観させて頂きました、県内英語科の先生方に、厚く御礼を申し上げます。

《引用文献》

- 文部科学省(2009)『高等学校学習指導要領』p.15, pp.115-116, pp.110-111
- 大下邦幸編著(2009)『意見・考え重視の英語授業』高陵社書店 pp.22-23, p.26
- 前田昌寛(2012)『高校英語「授業は英語で」はどこまで?』北国新聞社 p.71
- 江利川春雄(2012)『共同学習を取り入れた英語授業のすすめ』大修館書店 p.8

《参考文献》

- 文部科学省(2013)『言語活動の充実に関する指導事例集【高等学校版】』
- 文部科学省(2013)『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』
- 勝山高校(2010)『平成21年度SELHi研究開発実施報告書(第3年次)』
- 国立教育政策研究所(2012)『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』
- 日本教材文化研究財団(2012)『「思考・判断・表現」の評価のあり方Ⅱ』特集Ⅰ<英語科>
- 田中武夫・田中知聡(2009)『英語教師のための発問テクニック』大修館書店
- 平成25年度使用教科書『UNICORN English Communication 1』文英堂
- 福井県オリジナル英語教材『Fuku-English Introducing Fukui to the World』福井県教育委員会